

【解禁日時】

令和4年9月26日(月) 12時



令和4年9月15日

報道機関 各位

熊本大学

宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料4点を発見

(ポイント)

- 宮本武蔵に関する一次史料を新たに4点発見した。
- 寛永17年11月の山鹿御茶屋に、武蔵と足利道鑑のほかに武士の津川四郎右衛門、儒学者の朝山意林庵が呼ばれていたことや、武蔵が茶人桑山宗仙の孫と懇意であったことから、“文化人サークル”の一員としての武蔵の姿が明らかになった。
- 新藩主細川光尚との関係性を示す史料から、『五輪書』執筆開始時の光尚と武蔵の関係が明瞭になった。

(概要説明)

宮本武蔵(？—1645)に関する確かな歴史資料(一次史料)は、その晩年にあたる寛永17年(1640)に熊本藩主細川忠利(1583—1641)に招かれて以降のものが、ごく僅かに伝来しているだけです。今回、熊本大学永青文庫研究センターの稲葉継陽教授、後藤典子特別研究員らは、細川家の古文書群(公益財団法人永青文庫所蔵、熊本大学寄託)の中から3点、第一家老の松井家の古文書群(熊本大学所蔵松井家文書)から1点、合計4点の史料を新たに発見しました。新発見史料の概要は以下のとおりです。

- (1) 4点のうち2点(新史料1、2 永青文庫細川家資料)は、寛永17年11月に、忠利が肥後国山鹿(現熊本県山鹿市)の御茶屋(江戸時代の藩主や幕府の役人が参勤交代などに際して休息・宿泊した施設)へ武蔵とともに呼んだ3人の人物の名前が明記されているもので、忠利の命令を奉行所から担当役人に伝達する惣奉行衆の書状控えの分厚い冊子の中から発見されました。3人は、足利道鑑、津川四郎右衛門、朝山意林庵で、足利道鑑以外の2人は今回の史料により初めて明らかになりました。
- (2) もう1点(新史料3 熊本大学所蔵松井家文書)は、寛永19年閏9月に細川家第一家老の松井興長が細川家の大坂留守居下村五兵衛に宛てた書状の控えで、茶人桑山宗仙(1560—1632)の孫の桑山作右衛門と、武蔵が熊本で懇意にしていたことを示しています。
- (3) 4点目(新史料4 永青文庫細川家資料)は、細川忠利の跡を継いだ藩主細川光尚が江戸から国元に出した書状の控えの分厚い冊子の中から発見されたものです。寛永20年9月、光尚は江戸から武蔵に書状を出し、体調を気遣うとともに、来春熊本に戻ったら対面して話そう、と伝えています。

以上の新発見史料4点から、以下のことが明確になりました。

- (a) 晩年の忠利は、寛永17年に自らの政治思想を総括・体系化するために、武家故実（武家の行動を律する歴史的規範）、儒学（東アジア共通の統治思想）、そして兵法、あるいは茶の湯にわたる、文化人たちを集めました。武蔵はいわば思想としての兵法の体現者として招聘されたものと考えられます。
- (b) 寛永18年3月の忠利死去後も、武蔵は熊本で文化人集団の中に身を置きながら、新藩主光尚とも良好な関係にありました。これは、寛永20年10月からの『五輪書』の執筆の背景を、より具体的に示してくれる事実です。
- (c) 忠利が熊本に招聘した人々の履歴や文化的位置からみて、晩年の武蔵が兵法の大家として相当の評価を得ており、細川忠利のような明君と評価された大名の政治思想に大きな影響を与えうる存在であったことが明確になりました。

（説明）

〔概要〕

宮本武蔵（？—1645）に関する一次史料は、その晩年にあたる寛永17年（1640）に熊本藩主細川忠利（1583—1641）に招かれてからのものが、ごく僅かに伝来しているだけで、一次史料の不足は武蔵研究の大きな障壁となっています。そうした中で、今回、熊本大学永青文庫研究センターの稲葉継陽教授、後藤典子特別研究員らが、宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料4点を発見、調査しました。

今回発見したのは、寛永17年（1640）から同20年（1643）までのもので、熊本藩主細川光尚、細川家第一家老松井興長、それに熊本藩惣奉行衆が出した書状の控えです。

これらによれば、寛永17年、武蔵は藩主細川忠利によって、兵法家として、武家故実、儒学の第一人者たちとともに熊本に招聘されたこと、したがって武蔵がいわば思想としての兵法の体現者として高く評価されていたこと、さらに忠利の死後も、熊本で文化人集団の中に身を置いていて、新藩主細川光尚との関係も極めて良好であり、それが熊本での『五輪書』の執筆へとつながっていった事情が浮かび上がってきました。

〔発見から発表までの経緯〕

熊本大学が所蔵する「松井家文書」は、細川家第一家老の松井家に蓄積された3万6,000点にも及ぶ歴史資料群で、戦後、熊本大学に移管されました。永青文庫研究センターでは、2017年度以来、本史料群の本格的な目録作成調査と修復及び画像データ化を進めています。新史料3は、その過程で2018年に発見・解読された史料のうち的一点であり、傷みがひどかったため2019年度に修復を施し、展示可能な状態にまで甦りました。

本史料について検討を進める過程で、後藤典子特別研究員は、永青文庫細川家資料（熊本大学寄託、総点数57,000点）に含まれる分厚い冊子体史料を調査し、武蔵に関する3点の新史料を発見しました。それらが新史料1、2、4です。

新発見の4点の内容が、晩年の武蔵を考える上で、一連の検討に値するものであることがわかり、発表に至りました。

[本史料の背景]

島原・天草一揆での戦いを経て、いわゆる鎖国体制の確立段階に至った寛永 17 年（1640）、江戸にあった明君細川忠利は、将軍家兵法指南役の柳生但馬守や、将軍家光や天皇に禅を講義した沢庵和尚との交流を深め、同年 5 月 18 日に江戸を発ち、6 月 12 日には熊本に帰着します。忠利に招かれ、武蔵は寛永 17 年 7 月に肥後にやって来ます。

忠利が寛永 18 年 3 月に死去した後も、武蔵は細川家客分として新藩主細川光尚から変わらない処遇を受け、正保 2 年（1645）5 月、武蔵は熊本で死去します。武蔵が晩年に著した『五輪書』の執筆は光尚の求めによるとの説もあります。

[本史料の内容]

まず、今回発見された 4 点の史料に登場する人物を紹介しておきます。

足利道鑑（尾池義辰）…？—1642？ 足利 13 代将軍義輝の遺児とされる。道鑑の子息らは寛永 14 年（1637）に細川家に仕え、その後、道鑑自身も細川家に客分として迎えらる。寛永 17 年 2 月には道鑑の妻が大坂から熊本に引っ越してきている。寛永 19 年 12 月頃没。

津川四郎右衛門（津川辰珍）…1583—？ もとの尾張国守護で信長の織田家の主家にあたる斯波家の子孫。小倉藩主時代の忠利に呼ばれて客分となり、肥後で知行 1,250 石の家臣となる。辰珍の名乗りは足利道鑑（義辰）の一字を頂戴したとの説がある。

朝山意林庵…1589—1664 江戸時代前期の儒学者。祖父は織田政権で活躍した朝山日乗。朝鮮の儒学者李文長の学統をうける。李文長は細川忠利や沢庵和尚とも交流があった。寛永 11 年（1634）からは細川忠利より在京経費の支給をうけ、上方と熊本とを往来。寛永 15 年には儒教思想や政治・道徳論を説いた仮名草子『清水物語』を出版してベストセラーとなる。のち承応 2 年（1653）には後光明天皇に進講する。弟の朝山齋助は忠利・光尚に仕えた。

桑山作右衛門…？—？ 細川三斎（忠興 1563—1646）とも懇意だった利休直系の茶人桑山宗仙（1560—1632）の孫で、桑山作左衛門（理斎）の子。理斎は忠利とも親しかった。桑山氏は尾張の秀吉直臣出身。寛永 17 年 8 月、忠利は奈良にいた理斎の子息作右衛門を預かって熊本に下向させ、客分として米 500 石を支給した。しかし寛永 19 年閏 9 月 8 日に、山鹿温泉から出奔してしまう。

新史料 4 点の内容（大意）は、以下のとおりです。

（出典 新史料 1、2、4：永青文庫細川家資料 新史料 3：熊本大学所蔵松井家文書）

○新史料 1（寛永 17 年）10 月 29 日 細川家惣奉行衆書状控 忠利側近 3 名宛

来月 3 日から忠利様が山鹿御茶屋に逗留されるので、（足利）道鑑様、（津川）四郎右衛門殿、（朝山）意林庵、（宮本）武蔵、この御衆中に山鹿へ参上するよう命じよとの忠利様のご意向である。この旨、惣奉行衆として了解した。命令文書のとおり担当者に通達した。

○新史料 2（寛永 17 年）11 月 5 日 細川家惣奉行衆書状控 担当奉行 3 名宛

道鑑様、意林庵、武蔵の山鹿での御宿へ、すべてのお世話に必要な物品を滞りなく搬入するために、それぞれの担当として小姓衆・鉄炮衆を付け置いた。彼らが常に御宿に張り付いていたら、3 人が迷惑するだろうから、担当の者どもは脇宿にいさせて、

御用のあるときに奉仕するよう命じたが、このやり方で支障が出る場合には、柔軟に対応してほしい。

○新史料3（寛永19年）閏9月27日 松井興長書状控 細川家大坂留守居宛

急ぎ一筆申し上げる。桑山理斎の子息作右衛門は、忠利様の代から細川家に寄寓していたが、先月中旬、おできができて山鹿へ湯治に行き、何を考えたが、そのまま出奔してしまった。このことは大和にいる理斎や、幕府の大坂町奉行にも届けた。作右衛門は山鹿に赴くに際して、隣に住む宮本武蔵に長持と鎧櫃を預かってくれるよう頼んでいた。武蔵は作右衛門自身が長持・鎧櫃に封をすることを条件に、これらを預かった。この荷物は封を付けたまま大和に送付する。

○新史料4（寛永20年）9月13日 細川光尚書状控 宮本武蔵宛

一筆申す。私はこの間、熱病で煩っていたが、すっきりと回復した。もう少し力を付けるので、心配はいらない。おまえの方は、寒くなる時候だが息災だろうか。様子を聞かせてほしい。精一杯の保養が肝要だぞ。春には熊本に下って、対面で話をしよう。

[本史料発見の意義]

1. “寛永17年細川文化人サークル”の一員としての宮本武蔵の姿が明らかに

新史料1～3によって、寛永17年の山鹿御茶屋に、武蔵と道鑑だけではなく、朝山意林庵と津川四郎右衛門が呼ばれていたこと、武蔵が細川家と縁の深い茶人桑山宗仙の孫と懇意であったことが、初めて判明しました。

晩年の忠利は、寛永17年の前半に江戸で柳生但馬守や沢庵和尚と問答し、禅剣一如の理を極めようとしていました。それは、統治者としての自己の人生を総括する営みであったようで、6月に帰国するとすぐ、忠利は柳生・沢庵とは別の問答の相手を揃えました。それが武家故実（武家の行動を律する歴史的規範）の道鑑・津川、儒学（東アジア共通の統治思想）の朝山意林庵、そして兵法の宮本武蔵らであった、ということが明らかになりました。

忠利はこのメンバーを11月3日から山鹿御茶屋に招いて対面しました。数日間にわたって問答が行われたと考えられます。従来、このときのメンバーは武蔵と足利道鑑が知られているのみでしたが、今回の発見で、“寛永17年細川文化人サークル”の全容と、その一員としての武蔵の姿が明らかになりました。

武蔵は、武家の歴史や禅、それに儒学と結び付いた、武士の思想としての兵法の体現者として招聘されたものと考えられます。

2. 『五輪書』執筆開始時の細川光尚との関係が明瞭に

寛永18年3月の忠利死去後も武蔵は、新史料3によれば熊本で文化人集団の中に身を置きながら、新史料4によれば新藩主光尚とも良好な関係にあったことがわかりました。わけても、新史料4に記された寛永20年9月における光尚と武蔵との、思いやり、信頼感にあふれたやり取りは重要で、同年10月10日からの『五輪書』の執筆の背景に光尚の求めがあったとする説にリアリティを持たせる内容です。

3. 兵法家・宮本武蔵の歴史的位置が浮き彫りに

細川忠利が熊本に招聘した人々の履歴や文化的位置からみて、晩年の武蔵が兵法の

大家として相当の評価を得ていたことが、ますます明確になりました。

忠利は、同時代人から「一天下に続く人なし」と評された明君として知られます。寛永17年、死期を察した忠利は、足利将軍や室町期守護大名の子孫（足利道鑑、津川四郎右衛門）、禅僧（沢庵和尚）、儒者（朝山意林庵）、兵法家（柳生但馬守、宮本武蔵）らとの問答を通じて、同時代思想の総括に挑んだものと考えられます。武蔵が、ポスト戦国世代（幕藩体制確立期の支配層）のトップレベルの大名の政治・統治思想に大きな影響を与えうる兵法家であったことが、はっきりしてきました。

【公開情報】

本年11月3日（木・祝）～5日（土）に熊本大学附属図書館で開催される第37回熊本大学附属図書館貴重資料展「悲劇の藩主 細川光尚」にて、新史料3を公開する予定です。

*永青文庫研究センター

熊本大学附属図書館には、「永青文庫細川家資料」（約58,000点）や細川家の筆頭家老の文書「松井家文書」（約36,000点）の他、家臣家や庄屋層の文書群計10万点あまりが寄託・所蔵されており、永青文庫研究センターではこれらの資料群について調査分析を行っています。

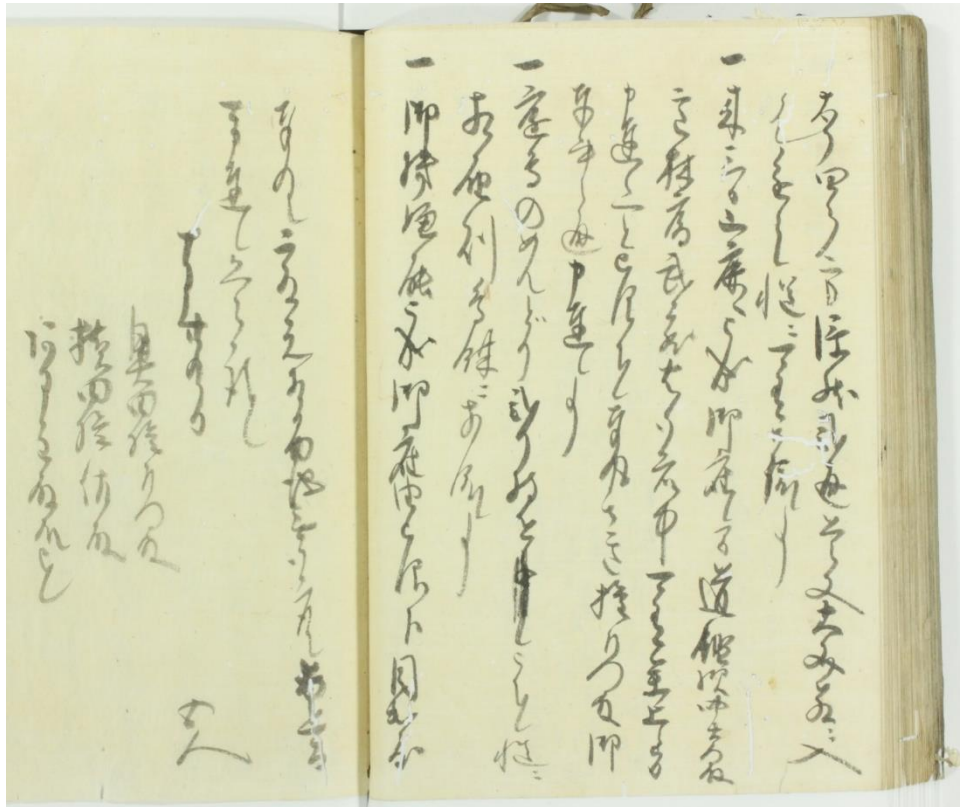
【お問い合わせ先】

熊本大学永青文庫研究センター

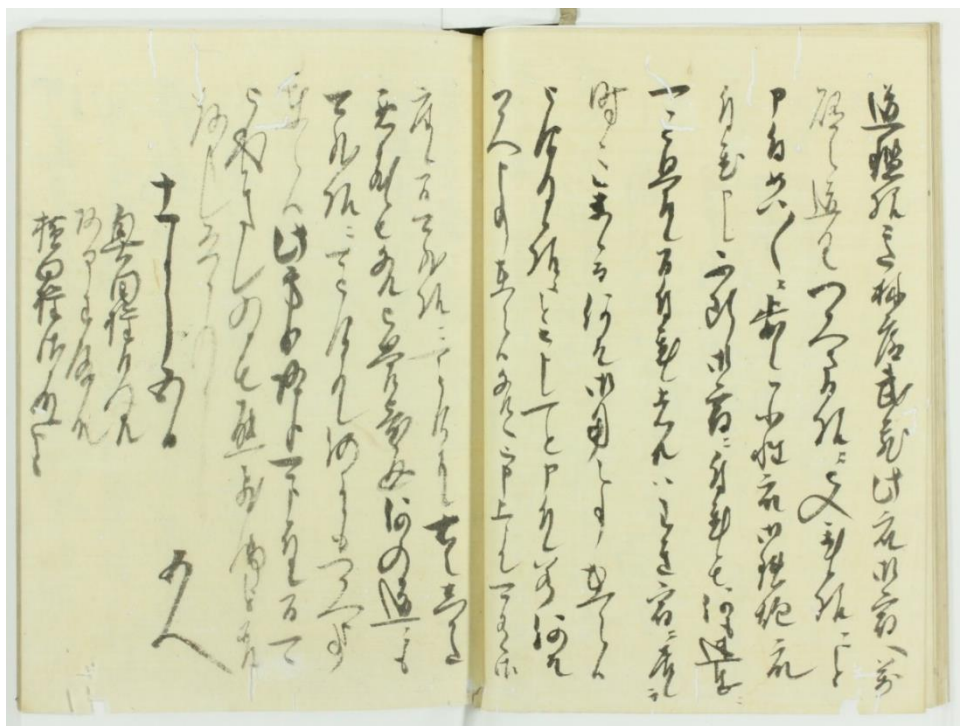
担当：（センター長）稲葉継陽

電話：096-342-2304

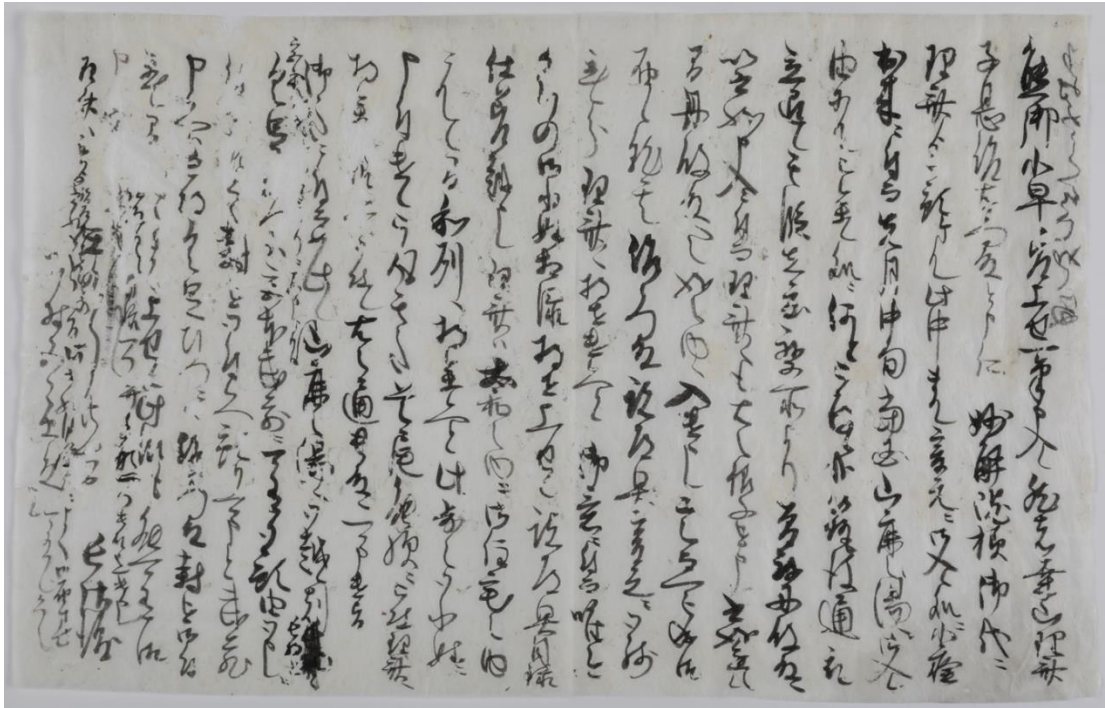
e-mail：eiseiken@kumamoto-u.ac.jp



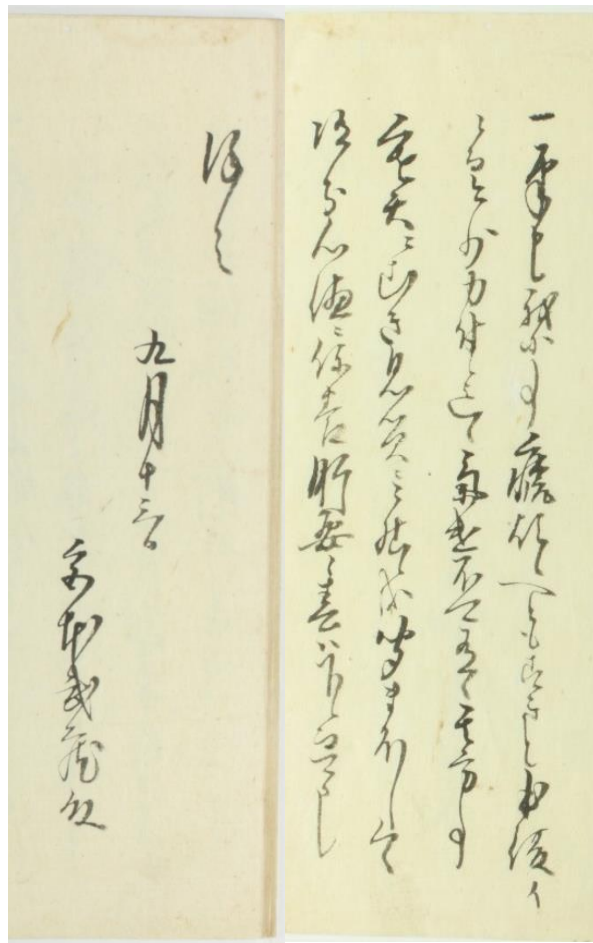
新史料1 (寛永17年)10月29日 細川家惣奉行衆書状控 忠利側近3名宛(該当部分、永青文庫10.11.30)



新史料2 (寛永17年)11月5日 細川家惣奉行衆書状控 担当奉行3名宛(永青文庫10.11.30)



新史料3 (寛永19年)閏9月27日 松井興長書状控 細川家大坂留守居宛
(熊本大学所蔵松井家文書17-30-20)



新史料4 (寛永20年)9月13日 細川光尚書状控 宮本武蔵宛(永青文庫4.2.111.3.2)